

天よ輝け 地よ響け  
～西銀座の街角の半世紀～

昭和40年代のこと、私が担当するUNIVAC-IIIというコンピューターがリッカーマシンに納入されていることから、担当技術者（サービスエンジニア）としてこの会社に常駐した。場所は銀座みゆき通りの北西端、帝国ホテルに向かう国電のガードの手前にある本社ビルだった。

リッカーマシンはその名の通りミシンの製造販売を業としたが、月賦販売の形を取ることで高価なマシンをかなりのペースで世の中に普及させた。

我々常駐するコンピューター会社の技術者は、毎週週明けにコンピューターを起動して安全確認を済ませてお客様（リッカーマシン）のオペレーターに引き渡す。引き渡された後は24時間稼働で業務処理が進められる。

主たる業務処理は、マシンを購入する目的で月額割賦するお客様一人一人の割賦の管理と商品の納入管理で、これが後に編み機や一般家電にまで広がっていった。戦後の復興から抜け出して高度経済成長に向かう途上で、向上心のある顧客を囲い込み長く購買意欲を持続させる商法でひとつの時代を作った。毎月顧客に送られる帳票はOCR（Optical Character Reader 光学式文字読取り装置）で読取り可能な文字の印刷がされており、顧客の割賦額支払とともにコンピューターに戻ってきて読取り処理される。当時この手の仕組みを「ターンアラウンドシステム」と言っていた。

時間に追われ、データ量に追われ、大量に印刷される帳票は「印字品質」という問題もあり、コンピューターの出力装置であるハイスピードプリンターと隣室で稼働する他社のOCRシステムは限界に近い性能を要求された。

常駐するコンピューター会社の技術者の出勤時刻は7時半だったか、全システムのウォーミングアップを済ませて安全確認が済む頃になると、本社ビルの全館放送で勇壮な前奏曲が響き渡り「社歌」が流れる。社歌が流れた後はそれぞれの職場で、組織長を中心に朝礼が行われた後、一日の業務が動き出す。「これから一日の仕事が始まるぞ」という緊張感が走る一瞬で、我々他社の人間にとっても背筋が伸びるひとときだった。

毎日耳にしていた「社歌」は脳裏にくっきりと転写されて残ったようで、定年退職後15年を過ぎたある日、閑暇なひとときを過ごしている頭脳に突然現れた。

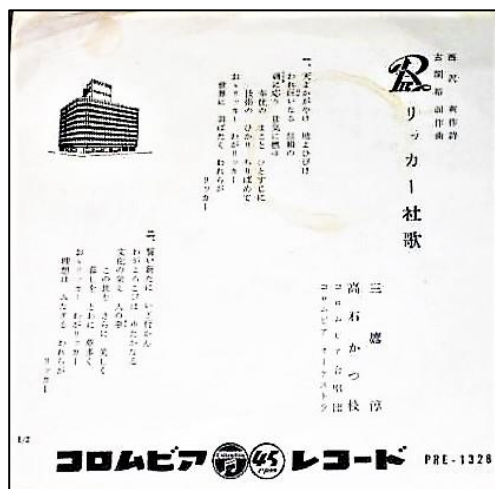
前奏曲に引き続いて流れてくる歌は、「天よ輝け地よ響け われ大いなる・・・」。所々歌詞が思い出せないが、終曲の「おおりッカー・・・」まで辿り着いた。

その晩から、思い出せない歌詞が気になって仕方がないので、インターネット上で様々な検索を試みた。リッカーマシンという会社は、その後経営不振に陥りダイエーの傘下に入ったがやがて消滅してしまっ

た。情報処理部門はかなり早い時期に独立して別会社化しており、IT系の会社として現在も活躍を続けている。

インターネット上の探索を重ねた結果、遂に見つけることができた「リッカー社歌」は、ヤフーオークションの展示画像にあったコロムビアレコードの1枚のレコード盤。同梱の歌詞カードの画像が答えを出してくれた。（左画像）

西沢実作詩・古関裕而作曲とあり、歌手の名前が三鷹淳・高石かつ枝・コロムビア合唱団、演奏はコロムビアオーケストラ。高石かつ枝は我々と同世代の歌手なので知っていたが、三鷹淳という歌手のことは全く知らなかった。1934年生まれで、読売巨人軍の球団歌なども手がけた声楽家のように、現在86歳のこと。



歌詞カードの画像の品質が思わしくないので、トリミングをしたり、画像修正をしたりしながら、定かでない自分の記憶を重ね合わせていった。文字の判読が困難なことと自分の記憶に自信がない部分もあり、正確ではないが何とか一番と二番の歌詞を思い出すことが出来た。(誤りがあったらご容赦下さい)

一、天よ輝け 地よ響け われ大いなる 信頼の 飴に応える 意気に燃ゆ 奉仕のまこと ひとすじに 技術のひかり ちりばめて おおりッカー 我がリッカー 世界に羽ばたく 我らがリッカー	二、誓いあらたに いざ行かん わが喜びは ゆたかなる 文化の栄え 人の幸 この世を さらに美しく 暮らしをとわに 夢多く おおりッカー 我がリッカー 理想はみなぎる 我らがリッカー
--	--

歌詞が蘇ると、次に曲が気になってきた。まずは、近所の中学校の門前の文房具店へ行き音楽のノートを購入。CASIO のメロディーキーボードを叩きながら、思い出したフレーズを五線紙にプロットしてみた。前奏は勇壮なメロディーで「ソ・ドシラソミレド レミファ・レドシラシド・」

思い出せない部分が少し残ったが、前後のつながり具合を見て想像でつないでみたり書き直したりで、約一週間を要した。(関係者の方、誤りがあったらご容赦下さい)

◆記憶から蘇ったリッカー社歌(wma ファイル)は[こちら](#)

#### <Appendix>

リッカーミシン本社があったリッカー会館は、「Daiwa 銀座ビル」という名になって残っている。昭和 38 年に建ったこのビルは、外装・内装には変化はあったものの基本的な作りは 57 年の歳月を経た今も変わっていない。鹿島建設が手がけた傑作のひとつとも言われているらしい。泰明小学校に面したビルの入口の叩きには大理石が配されており、その内の 1 枚にアンモナイトの化石が見事に残っており、赤坂プリンスホテル旧館とともに「地球の歴史を感じさせる建造物」でもあった。

2020 年 2 月、久しぶりにこの町を歩いてみた。昼休みにコーヒーを飲みに行ったワコールのショールームも、その横にあった歌えるドイツ風ビヤホールももうなかった。Daiwa 銀座ビルを取り囲む敷石は黒い色の板石に変っていた。剥がされた化石入りの大理石はどこへ行ってしまったのだろうか？

リッカー会館の地下にはトレビアンという喫茶店があり、業務打合せと称してしばしば休憩に行った。オーナー（気品のある美しい女性だった）とも顔見知りになり、週末の休業日にお店を開けていただき

貸し切りで高校時代からの親友の結婚披露パーティーをしたことがあった。

その親友も他界して何年もの月日が流れた。ビルの端っこにある地下に入る階段をのぞき込んでみたら、トレビアンがあった場所には何やら飲食店らしい看板が見えた。

人ばかりでなく、人の周りに存在するすべてのものが「50 年の歳月」を生きたのだ、と実感した。



以上